



渡部 剛さん（95歳）

中屋敷地区

R6・9・21聞き取り

神社は、もともと中屋敷分校の上の山にあったやつを移した。山の中にちよつと入った、誰も行かねえとこだったから、集会所の西手側、大木があるところの前にね。山の方にあつたときは鳥居もなく、移してから作ったんだ。

私が昭和32年に中屋敷に入った時には、神社は山さあつた。開拓神社というからには、最初に入植した人たちがつくったんだろう。みんな他から来ていたから、木な



開拓神社が最初にまつられていたと思われる山

んか売って金になるうちはいたけども、金にならなくなったら土地を売って出て行ってしまった。私は、野上の採石場の手前に実家がある。30年ごろ、北海道の出稼ぎから帰ってきたら、おやじが「土地がある」なんていって。青木先生って中屋敷分校の先生やっていた人が、辞めっから出ていったわけだ。土地もうちもあるって行ってみたら、土地はおこしてない、残ってたのは茅葺きの小

屋っこでランプ生活だべ。弟たちに「俺いらねえから、入れ」って言ったら、みんな「いらない」って。俺が30歳くらいのことだ。山の木切ったところを鋤でおこして、大豆撒いて取ったりして。当時、県がやかましくて植林は許可おりなかった。大豆では食えねえから山仕事だ。木を切って出すとか、炭焼とか。人頼む金は払えねえから、家内と2人。木は雑木ばかり。めばしい木は、

当時を知る町民のこえ

最初に入った人が出ていく前に切って売っているわけだから。うちの屋敷の西手に、木切って、土出して、赤土運んできて、木ずつと並べて炭窯ぶつたよ。1人でそんなおっきい窯いらねえから、30く35俵出る窯。

親父は「食えるようになるまで3年でも5年でも米味噌はくれる」とそういう条件だったから、縄で編んだ背負子せおって、実家さ歩いて行って、米味噌しょって

また帰る。ほかの人は、そんな条件もないわけだから、大変だったよ。3年間は米味噌もらってたけど、家内が氣遣って「もらわれねえ」って。そこからは自分で食べる米くらいは作って、やりくりしたけど、煙草買う金もなく泣いた時、何回もあったよ。

中屋敷で作って金になったもので……氣候が悪くて何やつてもダメなんだわ。ろくな川もないしな、田んぼつくるのも大変だった。インゲンも失敗したしね。桃なんか植えると、冬、木がみんな凍っちゃって皮むけちゃう。だから山仕事するしかないんだ。

それから営林署の仕事をやった。山の仮払いとか枝打ちとか。あと、やっぱり北海道さ行くと、倍の金にもなるからっていうことで中屋敷に入つた後も4、5年は行つたよ。どこかに勤めないと、中屋敷で生業はなかなか立たないよ。

中屋敷を離れる人は多かったから、それは寂しいわよ。でも、下りようとは思わなかった。また土地求めれば相当の金かかるからな。中屋敷で楽しみてねえけども、冬は山遊び、猟だな。山鳥から始まって兎、イノシシ。山は人の倍も歩いてた。